

2014年10月2日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺6

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

2003～2006年に海口市（海南島）で『海南地方志丛刊』47巻が刊行されている。国内では、国立民族学博物館、東北大学附属図書館、早稲田大学高田記念図書館などが揃いで所蔵している。その中で本研究に関係の有りそうな巻にざっと目を通したところ、以下の新しい知見を得ることができた。

明末（『〔萬曆〕瓊州府志』）に初めて現れたと推測される「長沙海・石塘海」という地理概念が、清初の『〔康熙〕瓊州府志』、『〔康熙〕萬州志』の中でも記述されている（『康熙瓊州府志』海口：海南出版社，2006，p89. 『康熙萬州志・道光萬州志』海口：海南出版社，2004，pp. 39-40.）。『〔康熙〕瓊州府志』では、すでに「長沙海・石塘海」の実態が不明である事を示す定型の文言が付されている。

古志、万州海中有千里長沙・万里石塘。然俱在東海大洋中。海舟触沙立碎、入塘無出理、人不敢近、□□□也。

末尾の字の欠けている部分は、本篇で見たように後の資料では「莫稽其實」とあり、ここでもそれと同様の意味の文が記されていたのではないかと推測される。

『〔康熙〕萬州志』、『〔道光〕萬州志』の中に念のため検討しておくべき記事があることに気づいた（『康熙萬州志・道光萬州志』p40，p307）。『〔道光〕萬州志』は『〔康熙〕萬州志』の文言をそのまま継承している。

獨洲洋。州南五十里許。濤雖平、下有怪石錯立。昔外番海寇之舟、時遇風飄、多覆于此。

「獨洲洋」は「獨洲山」（大洲島）周辺の海域である。ここで「怪石錯立」と書かれているのは如何なる地形のことか。近海の岩礁のことを指していると思われるのが自然であろうが、それほど特別な岩がこの海域周辺にあるのかという疑問も生じる。「下」とあるのが、ずっと南方を指すとしたら、パラセル諸島の岩礁を指している可能性もあるかもしれない。

ただし、海南島全体の地誌である『瓊州府志』はいずれも獨洲洋の記述において「下有怪石錯立」という文言を載せていない（康熙本は『康熙瓊州府志』p85, 89、萬曆・乾隆・道光の諸本は『中国地方誌全文検索叢書シリーズ 海南省 15種』（有）凱希メディアサービス（Kaixi Media Service）を確認）。「怪石」がどこの何であれ、重要な情報とみなされていないことが知られる。